
神殺し～約束の果て～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神殺し〜約束の果て〜

【Nコード】

N 8 6 1 6 L

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

アルヴィーズは、幼馴染の恋人、エレナと平穏な日々を送り、結婚の約束もしていた。そんな彼女をある不幸が襲う……。約束の果てに、待ち受けていたものは……。

夕方の大通りは、家路を急ぐ人、商品を大声で売り込む商人に溢れていて、とても賑やかだ……。しかし。

「神殺しだ。」

「神殺しだぞ。」

「神殺しのアルヴィーズだ……。」

俺、アルヴィーズが通ると、一瞬にしてその空気が凍りつく。これでもかと言うほど混雑していた大通りは、人波が見事に二分する。俺の目の前に、真っ直ぐに道が開ける。

「……。」

その道は、たまらなく通りにくい。歩くという行為を妨害されている訳ではないのだから、もちろん物理的な意味ではない。彼らは、気持ちの良いほど俺の邪魔にならないようにしてくれる。だが、彼らは気付いていない。その視線で、俺の行く手を妨害していると言うことに……。

軽く道端にきつい視線を向けると、途端にその辺りにいた人々は凍りつき、喉の奥から引きつった悲鳴を上げて後ずさりし、その場から逃げ出す。こんな光景にも、もう慣れた。この街の、住みにくさにも。だが、彼らは忘れてしまったのだろうか？自分が神殺しの異名を取るまでは、あんなに良くしてくれたと言うことを……。

もともとこの街は、周りを大国に囲まれた一つの独立した小さな国だった。つい、三年前までは。三年前のある事件がきっかけとなり、この国は隣国に攻められ、吸収された。その事件こそが、俺が神殺しと呼ばれ、人々ともうまく付き合えなくなった原因になったものだ。

「見て見て、アル！」

彼女は明るい昼下がりに、約束をした丘の上、その頂上にある木の元に息を切らせて駆けて来た。その様子を見て、俺はたまらなく不安になった。慌てて、彼女に声をかける。

「そんなに走らない方が良い、エレナ。また発作が起きたりしたら……。」

「大丈夫よ！アルは心配性なんだから！それより、見て！綺麗でしょう？」

そう言う彼女は、着ていた真っ白いワンピースの裾を軽く持ち上げて一回転して見せた。彼女の長い栗色の髪が、その動きに合わせてふわりと持ち上がる。柔らかな^{すみれ}薰の香りが、俺の鼻腔をくすぐった。

「ああ。もしかして、祭りの衣装か？」

その問いかけに彼女は満面の笑みで頷いて、俺の隣に腰掛けた。

柔らかな栗色の髪に、自分の指を絡める。彼女のその髪は、陽の光を含んで、温かかった。青い瞳が、俺を見上げて来る。

「素敵な衣装でしょ？私、今年は神殿でお祈りを捧げる巫女の一人になったのよ。だから、アルも見に来てね、私の晴れ舞台！」

「もちろん見に行くさ。どこかの誰かが緊張して転んだりしないか、心配だもんな。」

彼女の白い頬が、ぷくつと膨らんだ。抗議の意味で、俺を上目づかいに見つめて来る。

「失礼ね、私をいくつだと思っているのよ！アルの助けがなくなつて、ちゃんと巫女のお勤め位できるわ！」

「ハハハ、それは楽しみだな。当日に誰かさんが作った菓子を食べてあつたりしても、這つても見に行かないとな。」

「いつ私が作ったお菓子であつたつて言うのよー！」

笑い声が響く。俺とエレナは、平和な日々を過ごしていた。あのまま、穏やかな時を重ねて行けると思っていた。

「寒くなつて来たね。」

祭りを一週間後に控えた、ある秋の日だった。俺たちはいつもの場所で見会、他愛のない話をしながら時間を潰した。そして、いつものようにエレナを彼女の家まで送って行く途中で、ふと彼女がそうこぼした。

「そうだな……。」

ゴホッ、ゴホッ！

そう辛そうに咳をした彼女の肩掛けを、その細い首を包み込むように掛け直してやる。ありがとう、と笑った彼女のその表情は、寒空の下でも俺の心を温めてくれた。

「また、外に出られなくなっちゃうね。」

彼女は生まれつき体が弱く、冬の冷気は体に良くない、と言うことで、冬の間は外出が一切許されていなかった。沈んだ表情の彼女の頭を、優しく撫でてやる。

「仕方ないだろ、体は大事にした方が良い。」

「だって、また三か月もアルに会えなくなっちゃうんだもの……。」
口を尖らせる彼女があまりにもかわいらしく見えて、俺の足はふと止まってしまった。それから、自分でもつい一瞬前まで考えていなかったようなことを口走っていた。

「……じゃあ、俺の家に来るか……？」

「なあに、それ？」

二、三步先で歩みを止めて振り返った彼女の栗色の髪が、強い風にさらわれて乱暴に舞い上がった。それでも、季節外れな菫の香りは、相変わらず俺の嗅覚を心地良く刺激する。

「いや、お前が会えなくなるのが嫌だとか言うから、それならいっそ俺の家に住めばいいのにな、と思って。そうしたら、俺が家に帰ればいつでも会える訳だし、お前が無理したりドジなことをしていないか、俺もずっと見張っていることができるし。」

「失礼ね！私だってもう十八歳になるんだから、アルに見張られてなくたってドジなんかしないわよ！」

そう言っただけ彼女は舌を出して見せた。それに苦笑して見せてから、

俺は言葉を続けた。

「鈍いよな……。家に来いって言ったら、普通はそんな馬鹿みたいな答え方しないだろ。」

「え？意味わからない！じゃあどう答えろって言うのよ？」

わざとらしく大きく溜息をついてから、青い瞳に答えてやる。

「はいかいいえ、だろ。普通……。」

「どうして二択なのよ？意味わからない！」

今度はわざとではなく、本気で大きな溜息をついた。そうか、俺の言ったことの意味すら理解していなかったのか、と思つて。どことなく重さを意識しながら、答えを彼女に聞かせる。今から自分が言おうとしていることは、とても重要なことなのだ。その言葉の重さを、自分にも理解させようとする……。

「家に来い、っていうのはな、普通は……結婚の申し込みなんだ。

ここまで鈍いとは。いや、間抜け過ぎて気付かなかったのか？それとも、俺の言い方が難し過ぎたのか？」

俺の矢継ぎ早での質問に、答えは一つも返って来なかった。エレナは、唇をきつく噛み締めて俯いていた。

「私ね、体が弱いのだ。」

「そんなこと知ってる。今更どうした？」

「それにね、お料理もとっても苦手なの。」

「そつだろつな。お前の作ったマドレーヌ、かなりの頻度で食中りを起こしたからな。」

「だからね、お嫁さんとしては、間違ひなく役立たずだと思うの……。」

「……。」

「あり得るな。」

俺の一言に、彼女はグツと黙り込んだ。普段なら失礼ね、などと言つ言葉が返つて来たのだろうが、そんな元氣もないようだ。一呼吸置いてから、次の言葉が俺の口から自然とこぼれた。

「俺は、その役立たずな嫁が欲しいんだ。」

その一言で、全てが決着した。彼女は、涙をいっぱいいっぱいに

溜めた青い瞳を上げた。そのまま笑うと、彼女のその瞳を起点にして透明な光の筋が流れる。

「……はいっ！」

涙で顔をクシャクシャにする、彼女。その泣き笑いの表情は、俺には生涯忘れられないものとなった。祭りが終わってからお互いの両親に話す、というように約束をして、彼女の背中がその家の戸をくぐって見えなくなるまで見送ってから、俺は彼女の家を後にした。今にして思えば、あれが間違いだったのかもしれない。あの時、彼女をそのまま手放さずにいれば……。そのまま彼女の両親に話して俺たちの関係を認めてもらえば、あんなことにはならなかったのかもしれない。後悔は、俺の口の中に今でも苦く残っている。

そして、祭りの日はやって来た。彼女はあの日と同じ真っ白なワンピースで、他の巫女と一列に並んで神殿に入って行った。俺の目には、エレナの姿が一番眩しく見えた。この時に気付けば良かったのかもしれない。彼女のあの姿は、他の誰から見ても輝くばかりの美しさだったと言うことに……。

神殿には年に一度、この国の軍神が降りて来ていて、その日に合わせて祭りを行うのだ。この国の誰もが、自分たちの国の平和を守っている神を称えて、一晩中踊り明かした。俺は神殿の前でエレナが出て来るのを待っていた。祭りの喧騒は、もちろんここまで届いて来る。この中にいる神に聞かせようとしているのだから、それも当然のことなのだろう。朱色だった空がだんだんと群青色に染まり、寒さを感じ始めた頃に、エレナが息を切らせて走って来た。その頬は、うつすらと上気している。珍しく顔色が良いことに、俺は内心で嬉しさを覚えた。

「ねえアル、聞いて！軍神様がね、私のことを褒めて下さったのよ！人界にはもつたない程の美しさだ、って！」

軍神は、決して俺たちに名前を明かすことはなかった。だから俺たちは、普段彼を軍神様、とか、神様、とか呼んでいた。

「そりゃ良かったな。」

冷たく言いながらも、その言葉に俺は飛び上がって喜びたかった。彼女の美しさが他にも認められたという事実が、なによりも嬉しかった。

「もう、素直に喜んでよね！どう？軍神様にも褒められた程の美人を奥さんにする感想は？」

俺たちは、真っ直ぐエレナの両親の元に向かう予定でいた。彼女との結婚のことを、その両親に認めてもらおうと思っていたのだ。隣で楽しそうに笑いながら俺を見上げて来る彼女に、横目で答えてやる。

「一年の内三百六十日は食中りを起こしそつで、たまらなく不安だ。」

「うつつ……。」

黙り込んで俯く彼女の栗色の髪を、優しく、と言うことを極端に意識して撫でてやった。その髪は、今日は月光を含んでいるせいか冷たかった。青い瞳が、月を反射して柔らかく煌めいた。この時は、俺たちが引き裂かれるだなんて、思いもしなかった。彼女の髪の冷たさは、今でも俺の指先に残っている……。

俺たちは、無事にエレナの両親にも結婚を認められ、冬になる前に結婚式を挙げる予定になっていた。あの日と同じ真っ白な花嫁衣装は、きつと彼女にはよく似合うだろう。そんな平和ボケしたことを、俺は彼女が嫁いで来る日を指折り数えながら考えていた。彼女も同じく、自分の元にやって来る日を指折り数えて待っているだろう。そんなことを、疑いもせずに考えながら。

しかし、彼女が俺の家に引っ越してくるはずだった日、彼女の両親だけが俺の元にやって来た。そして、こう言った。エレナは、俺の元にはやれなくなった、と。あまりにも突然の出来事過ぎて、俺の思考は完全に停止してしまった。

「なぜ……？」

その言葉が、何も考えられなくなっている俺の口から辛うじてこぼれ落ちた。エレナの母親が、俺の問いを聞いてその場に泣き崩れた。どうやら、今までは立っているのもやっとだったらしい。椅子を勧めてエレナの父と協力して彼女を座らせてから、俺は先程の言葉に対する答えを待った。エレナが嫌だと言った、と言っ答えを、ひどく恐れながら。

「軍神様が……。」

「は？」

エレナの父が紡いだあまりにも突拍子もない単語に、俺は思わず口を挟んでしまった。国の守り神が、一体どうしたと言っのだろうか？

「軍神様が、エレナを神殿の贄として差し出せ、と言ったそうだし……。国長が、今朝それを伝えに来た……。」

この国には国王、などと言う者は存在せず、代わりに民によって選挙で選ばれた代表が、国長として政治を行っていた。その長が、彼女の家に？そして、神殿の贄、と言うことは。

「う、そでしょう……？エレナを、神殿の贄に、だなんて……。」

体が、震える。全身の血が逆流して、総毛立つ。神殿の贄、だなんて……。神殿の贄、と呼ばれる者は、年に一度の祭りの際に守り神である軍神に身を捧げる巫女のこと、通常は身寄りのない娘が選ばれて、神殿に送り込まれていた。神殿から戻った娘たちに共通することは一つ。皆、必ず正気を失って戻って来るということ。中で何が行われているのかは、この国の民は誰も知らない。ただ、正気を失って戻るのだから、相当恐ろしい目に遭っているに違いない。それでも毎年神殿に贄を捧げた理由は、この国が大国に囲まれた、複雑な場所にあるということだった。

「エレナは……俺の所に、来るんですよ？春になったら、あいつの好きな小鳥を捕まえて、飼おうって約束していたんです。庭に桃の木を植えて、二人で収穫しようって、約束していたんです。」

「ああ。全部、エレナから聞いている。君がどんなにあれを大切に

してくれていたか、私たちにもよくわかっている。だが、どうかわかってくれ……。」

エレナの父が、隣で机に突っ伏して泣いている妻の肩を優しく撫でながら、俯いたままそう言った。俺とは、一度も目を合わせようとはしない。その目からは、透明な滴が今にもこぼれ落ちそうになっている。

「エレナは……今日、この家に来るはずだったんです。彼女の部屋も用意して、二人で休めるように、大きな寝台も用意したんです。それなのに……。」

それなのに、彼女は来ないのか？あの明るい笑顔が俺の心を温めてくれることは、二度とないのか……？エレナの父が、ふと彼の懷をまさぐった。そして、封筒を一つ、取り出した。董の香りがする、封筒。

「……エレナから、君宛の手紙だ。どうか、読んでやってくれ。」

受け取ったそれを、その場でびりびりと破いて開ける。その途端に、さらに董の香りが強くなった。まるで、封筒の中に彼女の香りが閉じ込められていたかのように。

「親愛なるアルヴィーズ

まずは、ごめんなさい。私、あなたの所には行けなくなっていました。他に、どうしても行かなければならない所ができてしまったの。父さんや母さんから、あなたも聞いているでしょうね。そうですね、軍神様の所です。本当は、あなたの所以上に行きたい所なんです、ありません。それでも、行かなくてはならないの。

小さな頃からいつもそばにいてくれて、体が弱いせいで友達もいなかった私を大切にしてくれたあなたには、本当に申し訳ないことをしたと思っています。あなたが、家に来るか？と言ってくれた日のことは、今でも鮮明に思い出せます。体が弱いということ諦めていた私の夢を、現実の物にしてくれる言葉だったのですから……。その夢が叶う直前でのこの出来事なのですから、やっぱり私には望むことも許されないようなことだったのかもしれない。いまま

ありがとう、アル。幸せに……。

愛を込めて エレナ」

「嘘だ、ろう？エレナ、が、神殿の、贅に……？」

一言一言確かめるように、ゆっくりと息を吐きながらゆっくりと口に出して行く。それに。

「なぜ、彼女が謝る必要があるんだ？軍神様がおかしなことを言わなければ、こんなことにはならなかったんじゃないのか？」

「アル！滅多な事を言うんじゃない！」

エレナの父が、蒼白な顔で俺をたしなめた。だが俺には、そんなことに構っている余裕すらなかった。

「おじさん、それで、エレナは今どこに？」

唇が白くなるほど噛み締めて、エレナの父は俯いた。それが、答え……。俺は、そのまま家を飛び出した。

それから後は、何がどうなったのか、俺は良く覚えていない。ただぼんやりと、エレナの叫び声と、軍神と呼ばれていた化け物の断末魔の叫びが俺の耳の中にこだましていた。気が付くと俺は、神殿の奥の間、と呼ばれる場所に立っていた。左脇には、ぐったりと気を失ったエレナを抱えている。そして右手には、神殿の聖剣がしっかりと握られていた。その白銀の切っ先からは、黒い生温かい液体が滴り落ちている。そして、俺の足元には……。

俺の足元には、かの神の変わり果てた姿があった。醜い鱗に、手足のない体、コウモリのような翼が生えていて、額からは恐ろしい一本角が伸びている。それが、軍神を名乗っていた者の正体だった。翼と角がある、巨大な蛇の魔物……。これを見れば、あまりの恐ろしさに正気を失ってしまうというのも納得がいくというものだ。俺たちはこんな魔物^{もの}に騙されて、国を守る神として崇めていたのか……。

「ア、アルヴィーズ！お前、何をしたっ？」

そこへ、神殿の神官が一人、駆けて来た。左肩に、彼は刀傷を負

っていた。俺が持っている、聖剣がつけた傷だろう。

「神の名を騙っていた化け物を、始末しただけだ……。」

「なんと愚かなことを！」

神官は、そう俺を非難した。そして、足元の化け物の死体に取り縋る。正直言つて、意味がわからなかった。化け物を退治した俺ではなく、こんな化け物の死体に寄って行く、その気持ちがわからない。

「彼が魔物の類であることは、私たちはとうに知っていた。」

「知っていた、だとっ？今までに多くの娘たちが犠牲になって来ているんだぞ！」

俺は、自分でも意識せずに声を荒げてしまっていた。ふつつつとした感情が、俺の口について外に出て来てしまったのだ。

「……多くの民の平和のためには、ほんの少しの犠牲は仕方がなかったんだ。」

「犠牲を強いられた娘たちの気持ちはどうなるっ？そんなこと、一度も考えなかったんじゃないかっ？」

「その通りだ……。」

そこで、神官は立ち上がった。そして、軽蔑や怒り、憐みなど、多くの感情が入り混じった複雑な表情で俺を見た。彼の指先が、ひとと俺に向けられた。

「これよりお前は、神殺しの異名を背負うこととなる。……神殺しとして人々に恐れられ、忌避され、排斥される。それが、お前に耐えられるかな。」

神官はそう俺を呪うような言葉を残して、魔物の死骸を抱いてスウーッと神殿の闇の中へと姿を消した。俺は、彼が消えた方を見つめながら決意を口にした。

「後悔は、しないさ。これで、エレナが戻って来るなら……。」

片腕で抱えていた彼女の体を、両腕で抱きかかえるようにした。その時、彼女の体がピクリと動いた。どうやら、ようやく気付いたようだ。

「エレナ？」

そのまま歩みを止めて、俺は彼女を見下ろした。栗色の長いまつ毛に縁取られた青い瞳が、俺の目に映った。

目の前に開けた最高に通り辛い道を抜けて、俺はやつと家に帰りついた。どこからか、歌が聞こえてくる。家の前に、長い栗色の髪が揺れるのが見えた。

「ただいま、エレナ。」

俺は、そう彼女に声をかけた。栗色の髪が翻って、青い瞳がこちらに向けられた。こちらに向けられたのは、明るい笑顔。

「おかえりなさい、アル。今日はね、マドレーヌを焼いたのよ。」

ふふっと、彼女はまた嬉しそうに笑った。

「ああ、わかった。ほら、風が冷たくなって来た。もう中に入るぞ。」

俺はそう言って彼女のショールを掛け直してやってから、立ち上がるように促した。彼女は、桃の木の下に座っていた。立ち上がったからもその木を見上げ続ける彼女に、俺もつられてそれを見上げた。桃の木は、たくさんの実を付けていた。もうすぐ、収穫の時期だ。

「もうすぐ収穫だな。エレナ、覚えてるか？三年前に約束しただろ？一緒に住むようになったら、庭に桃の木を植えて、一緒に収穫しようって。」

彼女を見下ろすと、青い瞳が嬉しそうに細められた。そして。

「おかえりなさい、アル。今日はね、マドレーヌを焼いたのよ。」

そう言って満面の笑みを浮かべ、彼女はまた、ふふふ、と楽しそうに笑った。その瞳には、光、と言う物が、存在していない。覚悟はしていた、つもりだった。だが……。俺の心は、あの日で止まったままだ。泣き笑いの表情が、記憶の彼方でひどく眩しい……。そして。

彼女は、魔物の子を孕んでいる。三年前のあの日から、彼女の腹

部は少しずつ膨らんでいる。それを魔物の子だと知りながらどうすることもできないでいる俺も、あるいは、魔物なのだろうか。一度狂わされたオルゴールは、狂った旋律を奏で続ける……。俺の耳の奥に、狂気が響く……。狂わされた旋律。その先には、一体、何が待ち受けているのだろうか……？

約束の果てには、夢幻に彩られた狂気の沼があった……。

（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。

少し変わった作風の物を書きたい、と思ひまして、今回の作品ができあがりました。いかがでしたか？もしよろしければ、ご意見、ご感想などをお聞かせ下さい。

ただいま連載中の異国恋歌〜風空の姫〜の方も進めて参りますので、今後ともどうぞよろしく願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8616/>

神殺し～約束の果て～

2010年10月8日13時26分発行